



子宮頸がんワクチンで 集団提訴 63人、健康被害訴え

子宮頸がんワクチン接種後の健康被害を訴える15~22歳の女性63人が、国と製薬会社2社に総額約9億4500万円の損害賠償を求める集団訴訟を東京、大阪、名古屋、福岡の4地裁に起こした。体の痛みや歩行困難、視覚障害といった症状を訴え、国と製薬会社はこうした被害を予見できたにもかかわらず回避措置を怠ったと主張している。

子宮頸がんワクチンの副作用をめぐる集団提訴は初めて。各地裁に提訴したのは、東京28人、名古屋6人、大阪16人、福岡13人。接種時期は2010年7月~2013年7月で、ほとんどが中高生時だった。

訴状では、グラクソ・スミスクライン社のワクチン「サーバリックス®」とMSD社の「ガーダシル®」について、日本に先行して承認した海外では、死亡例や重症例など多数の副作用が報告されていたと指摘。国は危険性を認識していたにもかかわらず安全性の調査をせず承認し、接種を推奨した責任がある、などと主張している。症状と接種の関係については、接種後に共通の症状が現れていることから「法的因果関係が認められる」とした。

厚生労働省(以下、厚労省)によ

ると、これまでに接種した人は推計で約340万人。2016年4月末までに医療機関と製薬会社から報告された「副作用が疑われる例」は約2900件(うち重症は約1600件)に上る。

(7月27日付朝日新聞)

男80.79歳、女87.05歳 平均寿命、男女とも 過去最高

厚労省は、2015年の日本人の平均寿命が女性87.05歳、男性80.79歳となり、ともに過去最高を更新したと発表した。

前年と比べ女性は0.22歳、男性は0.29歳延びたが、女性は長寿世界一から2位に、男性は3位タイから4位へと順位を落とした。

(7月28日付読売新聞)

赤ちゃんが睡眠中につこり 「自発的微笑」、 ニホンザルでも確認

人間の赤ちゃんが睡眠中になっこととする現象「自発的微笑」を、ニホンザルの赤ちゃんでも確認したと、京都大学霊長類研究所の研究グループが発表した。

親に育ててもらうために、赤ちゃんが本能的に愛らしくほほ笑む現象と考えられてきたが、ニホンザルではそうした可能性は低く、人間の自発的微笑が起きる原因につい

ても再考を迫られるという。

ニホンザルの赤ちゃん7匹の睡眠中の様子を観察。ほほ笑むように口の端が上がる現象が1時間に平均約41.4回起きることが確認された。人間の自発的微笑は1歳頃までみられる。笑顔を見せて親に育児を促すために行なっているとされてきた。しかし、成長したニホンザルが笑う時は、人間と違い口を大きく開く。赤ちゃんザルが口の端を上げた表情をしても、親ザルには笑顔と認識されない可能性が高いという。

(8月3日付読売新聞)

体外受精、乳がんリスクに 影響せず オランダ女性約2万人調査

体外受精(IVF)による不妊治療では、通常、飲み薬や注射による「排卵誘発剤」を用いた「卵巣刺激」が行なわれる。このことが、長期的には乳がんリスクを高める可能性があるのではないかと危惧されていた。しかし、オランダがん研究所のグループがIVFを受けた女性2万人を約20年間追跡調査した結果、IVFを受けた女性と受けたことがない女性の間で乳がんリスクに差はないことがわかった。調査結果の詳細は米医学誌「JAMA」(vol.316, 2016年)に発表された。

オランダがん研究所などの研究グループは、オランダの不妊治療

の専門クリニック 12 施設で 1983～1995 年に IVF による不妊治療を始めた女性 1 万 9158 人と、1980～1995 年に IVF 以外の方法による不妊治療を始めた女性 5950 人を対象に、2013 年まで追跡調査した。

その結果、IVF を受けた女性と女性全体あるいは IVF 以外の不妊治療を受けた女性との間に乳がんリスクの差はなかった。55 歳までの乳がん発症率は、IVF を受けた女性で 3.0%、IVF 以外の不妊治療を受けた女性で 2.9%だった。また、不妊治療に使われた薬の種類によるリスクの差も認められなかったという。

(8 月 10 日付読売新聞)

臍帯血から iPS 作製 京都大学の研究所

再生医療に使うために備蓄する iPS 細胞(人工多能性幹細胞)を、京都大学 iPS 細胞研究所(山中伸弥所長)が、新生児の臍帯血から作製した。同研究所によると、臍帯血からは初めて。8 月下旬にも医療機関などに提供できるという。

備蓄用の iPS 細胞は、移植しても拒絶反応が起きにくい特殊な白血球型をもつ人の血液からつくる。個々の患者からつくるより、コストや時間を大幅に短縮できるというメリットがある。

同研究所ではすでに、成人の血液から作製。臍帯血からの作製に関しては、2012 年に厚労省の関係委員会で認められた。成人の血

液に比べ、ストレスや紫外線の影響を受けていないため、遺伝子変異が少なく、高品質と期待されている。

同研究所は全国の臍帯血バンクに協力を呼びかけており、成人の血液からつくる分を含め、2022 年度までに 80～90%の日本人に移植できるさまざまな白血球型の iPS 細胞を 100 種類近くそろえる計画だ。

(8 月 17 日付読売新聞)

育児疲れの母親に ママケアデイスサービス、 静岡市

静岡市は育児疲れの母親にリフレッシュしてもらう新制度「ママケアデイスサービス」を 8 月下旬から始める。専門の保健師らが相談に応じ、温泉などで心身を休めてもらう。対象は静岡市在住の生後 4 か月～1 歳未満の赤ちゃんの母親。場所は民間の温泉施設や旅館など 4 か所。平日の午前 9 時半～午後 3 時半で、最大 4 組受け付ける。

保育士、助産師、市の子育て支援の養成講座修了者ら最大で 4 人が付き、午前中は子どもと遊んだり、母親の相談に応じたりする。昼食後は母親の希望次第で、温泉につかったり、布団で休んでもらったりする予定。料金は 1 回 1500 円。ほかに昼食代(1000～1500 円)や入浴代 500 円がかかる。

市は「家庭や地域での母親の孤立を防ぐ場にして、母親がもう 1 人産みたいと思えるようにしていきたい」と話す。

(8 月 18 日朝日新聞)

オキシトシン投与 女性の自閉スペクトラム症 患者にも安全

福井大学などの研究チームは、対人関係が苦手な自閉スペクトラム症の症状を改善するとされるホルモン「オキシトシン」の臨床試験の成果を米科学誌電子版に発表した。チームによると、同様の研究で初めて女性患者の子宮の状態やホルモン値を観察。女性にも安全に使用できると確認した。

自閉スペクトラム症は、自閉症やアスペルガー症候群の総称。厚労省によると、自閉症の発症頻度は男性が女性の 4 倍。男性患者が多いため、これまでの研究では女性患者への安全性は注目されてこなかった。

オキシトシンは男女ともにあるホルモン。他人との信頼関係の構築に関係するとされる。母乳を分泌させたり、出産時に子宮を収縮させたりする働きもある。女性に投与すると、ホルモンバランスの異常などが起きるとの懸念があった。

研究チームは、女性患者計 13 人に 12 週間程度、オキシトシンを点鼻。今回初めて産婦人科が診察し、試験の前後や最中で乳汁漏れなどの異常がないか調べた。

オキシトシンの量を一定量より多く投与すると、症状改善の効果が大きいことも報告した。

(8 月 23 日付産経新聞)